
双刃の黄金騎士

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双刃の黄金騎士

【Nコード】

N2744V

【作者名】

由真

【あらすじ】

牙狼のオリジナルストーリーです。

主人公オリジナルで、詳細な設定もよく分かってないまま書いてます。

プロローグ

鬱蒼と茂る森の葉が、小さな風に揺れては微かな葉擦れの音を立てる。

「さみい、さみいよ。何でここ、こんなに寒いんだよ」

月の明かりもなく、深遠とも思える闇夜を見渡しながら男は呟く。夏であるにも関わらず、この森に踏み込んだ途端周囲の温度が下がった気がしたのだ。

それは森の中ゆえの涼しいという感覚ではない。真冬の暖房が効いた部屋から、雪の降る外へ出たというぐらいに温度差が激しい。

「本当にこっちで合ってたのか？ラブホなんて全然見えねえぞ」

右手に持った懐中電灯の光が、前を歩く女を照らし出す。顔立ちは幼く清楚そうな雰囲気、漂う女は、近隣のお嬢様高校の制服を着ていた。彼女はライトが当たったことに微かな嫌悪を見せたものの、すぐに前を向いて歩き出した。

男は寒さに凍えるように身を震わせながら、女の後を追う。

「まさか、今更やるのは嫌だとかいうんじゃないだろうな」

森に入って十分。

この異様な寒さに我慢して女に付いて来たのは、彼女と性行為ができると思ったからだ。

なのに、いつまで経ってもホテルには辿り着くことができないし、女は森に入ってからはずっと無言のまま。そもそも、『ホテルに行かないか』と誘ったのは彼女の方なのに、何のアクションも見せないのは馬鹿にしていると思えなかった。

「いい加減にしろよ！何で、喋らねえんだっ」

顔を真っ赤にして怒鳴りながら女の体を押し倒す。地面に体を叩きつけられたにも関わらず、女は何の抵抗もしなかった。

地面に置かれた懐中電灯に照らされた女は無表情のまま、覆い被さる男を静かに見つめていた。

「こういうの初めてか？ 案外、やってみたらハマるんじゃないの」
下卑た笑みを浮かべながら女の体に手を伸ばそうとした瞬間、どこからか声が聞こえた。

「いーち」

ハッとして女を見る。

いや、女ではない。

あれは女の声というより、まだ小さな子供の声だ。そう思い、男は慌て首を振る。

この森の中、ましてやこんな深夜に子供が居るはずなどない。

「にいい」

まただ。

また子供の声が、空耳とは思えないはつきりとした声で聞こえた。懐中電灯を拾い、辺りの闇を照らしてみるも子供どころか人の姿さえない。

「鬼ごっこ始まるわよ。逃げなくていいの？」

今まで無表情無言の姿勢を貫いていた女が一転、嬉々とした表情を浮かべ男を見上げていた。

「な、なに言ってるんだよ！」

男は狼狽しながらも、女の異常な様子に体を離していた。

「さあーん」

子供の声が徐々に大きくなっていく。

だんだんとこちらに近づいてくるのが分かる。

「なんなんだよっ。これなんの冗談だ？ おい、マジでやめろよっ」

混乱する男は森に向かって怒鳴り散らす。

「しいい」だが、子供の声が止むことはなかった。

「早く逃げなきゃ。餌は捕まったら食べられちゃうんだよ」

けられらと、まるで友達と話しているような純粋な笑みを浮かべる女の目が黒目を失い白目へと変化する。

瞬間、男は悲鳴をあげ脱兎のごとく走り出していた。

「ごおお」

まるで、保育園の幼児達が純粋な遊びをしているかのように声は楽しげだ。

未だに状況は掴めないでいる男だったが、この異様な雰囲気から一刻でも早く抜け出したいと全力で走る。

真つ暗な闇の中、背後に迫る子供の声から逃れようとするも声との距離は縮まるどころか近づきつつある。

「ろおく」

幾重も連なる森林は、まるで底無し沼のように続いて一向に出口が見えない。

男は焦った。

いくら走っても、迷うはずのない小さな森林で出口が見えてこない。

森林自体が意志を持って、男を閉じ込めようとしているかのような。

「しいちい」

「はあちい」

「きゅうう」

「じゅうう」

そのカウントを最後に声が消え、背後にあったはずの気配も無くなる。

立ち止まった男の眼前には、一向に見えることのなかった街灯に照らされた公園が見えた。

「た、助かったのか？」

恐る恐る公園に向かって歩き始める。

光の下には、カップルや帰宅に急ぐサラリーマンの姿。

先ほどの不気味な出来事が全部夢のように感じるほど平和な光景に、男はいつの間にか急ぎ足で公園へと出ようとする。

希望を見いだした一瞬だった。男の太もを何かが掴んだ。

ハッとして見れば、そこには小学生くらいの男の子。

終わった。

なぜだか分からない。

ただ、本能的に男は悟った。

自分は死ぬのだと。

「みいつけた」

その言葉を最後に、男の世界は闇の中へと消え失せた。

「ホラーの気配が消えた」

魔道輪ギルバは、微かに戸惑いながら言った。

ベルトのバックルに取り付けられた龍を象った魔道輪は表情こそないが、声色だけで察することはできた。

「どうやら、食事も終わったばかりらしい」

地面に付着した血痕を指で触れれば、まだ温かく指を赤く濡らした。木々の合間から微かな月光が差し込み、真っ黒なコートに身を包む男の姿を映し出す。

男の名前は、タムムラ龍村 レン蓮。

赤みがかかった髪に少し焼けた肌、整った顔立ちをしている容貌からは、どこにでも居る街を歩く若者と大差ないように見える。彼が魔界騎士として、日夜ホラーを狩っていることなど誰も予想できないどころか、考えも及ばないはずだ。

「今回で何回目だ？」

蓮は森の中を見渡しながら、ギルバに問いかける。

「4度目です。今回もやはり気配がすっぱりと消えていますね」

ギルバの青年のような声色が、困惑しながら答えた。いつもは冷静に状況を整理してくれる彼も、今回の事態には付いていけないらしい。

ホラーは陰我あるオブジェをゲートとして現れる。昼間そのオブジェを浄化さえすれば、ホラーが現れるのを食い止められるはずだ。今まではそれでホラーが出現することもなかったのに、最近になってホラーの気配が頻繁に察せられるようになった。

しかも、そのホラーは未だに蓮たちに姿を見せずして人間をエサと

して食している。

「これじゃ、ただの魷ごつこだ」

苦々しげに呟いた蓮は、ふと森の中に動く光を見た気がした。

「あれは、何だ？」

自然と懷に隠していた刀へと手を伸ばす。

「ホラーの気配はないですが、気をつけて下さい」

「分かってる」

蓮は警戒しながら、光のもとへ近づく。

光が蓮を照らし出すのと同時に、蓮はその光を叩き落とし刀をそいつへと向けていた。

「きゃっ」

女の悲鳴だった。

落ちた懐中電灯に照らし出されたのは、若い女の姿だ。

歳は大学生くらいだろうか、肩まで伸びた黒髪が風に揺れ、切れ長の目は今や恐怖を感じたように蓮を凝視している。

「あんた何者だ？」

蓮の問いかけに女は答えない。顔面蒼白になりながら、蓮を見つめている。

蓮は刀を突きつけたまま、女の眼前で魔導火を着火する。

ジュツという音と共に、緑の炎が燃え上がる。

彼女の目にはホラーを示す証が浮かぶこともなく、小さな緑の炎が映るだけだ。

蓮は魔導火と刀を片付けながらも、女から視線を外さず問いかける。

「なぜ、こんな真夜中に女性が一人歩いているんだ？」

極力、女が安心するように優しい口調を心がけては見たものの女は緊張した面もちで答えない。

突然襲撃を受け、刀まで突きつけられたのだ。

当然の反応だと言えるだろう。

女の扱いに関しては不得手な部類に居る蓮が、ハアとため息をついた時だった。女が唇を震わせながら呟く。

「あなたが、私を、殺すのね？」

先ほどとは違う睨みつけるような女の目が印象的だった。

思えば、これが秋山ほのかとの出会いであり、蓮の戦いの始まりであつた。

ほか

深くたちこめた霧の中を、彼女――秋山ほかは無我夢中で走り続けていた。

後ろから迫りくる気配に怯え、もつれそうになる足を必死に動かす。濃霧のせいで、追跡者の姿は見えないが、追いつかれてはいけないという強迫観念が彼女にはあった。

「助けてー」

誰も居ない世界に向かって、彼女は叫ぶ。

そのたびに、追跡者が聞いたこともない言語を返してくる。言語を理解することは出来ないが、その口調には嘲笑の響きが混じっているような気がした。

まるで、

「誰も助けに来ない」

そう言っているようだった。

息が切れ始め、体力も限界に近くなる。

このままでは、追跡者に捕まってしまうと思った瞬間だった。

ほかの体が、跳ね飛ばされる。

一瞬、何が起きたのか分からず茫然とするも、すぐにそれが眼前に立つ者のせいだと気づく。

黒いコートに身を包んだ男が、彼女を阻むように佇んでいる。

この男にぶつかったのだと理解すると同時に、背後から追跡者の咆哮が響く。

「た、助けて」

怯え、縋るように言った瞬間だった。

胸に衝撃が走る。

ゆっくりと視線をおろせば、胸を突き刺す刀。

刃の柄を握っているのは、姿なき追跡者ではなく目の前に立つ男だ。胸を刺されていると理解した瞬間、鋭い痛みに襲われる。

「ホラーは狩らねばならない」

ホラー？

なにそれ？

なんなのよ。

男の冷たい言葉に、いくつもの思いが頭を駆けめぐっていく。だが、それを声に出す間もなく世界が暗転していた。

ハッとして目を覚ます。

淡い青色カーテンの合間からは朝日が差し込み、見慣れた部屋に光を落としている。

クリーム色の壁紙には、最近流行りのアイドルのポスター。

高校卒業旅行の際に撮った写真。

見慣れた机に、昨日飲み残したコーヒー。

いつもと変わらない自室を見て、ようやくほのかは自分が夢を見ていたのだと理解した。

念のため、胸元を確認してみるが傷跡も何も見られなかった。

そこでようやく、ほのかは安心したように息を吐く。

これで、何度目だろうか。現実とも錯覚しそうなほどに、ハッキリとした感覚を持つあの夢を見たのは……。

上半身を起き上がらせ、ポスターの側にある姿見へ視線を向ける。

「ひどい顔」

あの夢を見始めてから、寝不足気味のせいか顔色の悪い自分が映る。

「あんた殺されるよ、か」

夢を見るキツカケともなった占い師の言葉が蘇る。夢を見始めた当初は、占いが気になってこんな夢を見るのかとも思っていたが、ここまで続くとストレス以外の要因がある気がしてならない。

まさか、あの占いが本当だとか？

そんなバカなことあるわけない。

頭に浮かんだ嫌な考えを振り払うように、ほのかは頬を叩くと今日の準備を始めた。

親友である七瀬麻衣子の頼みでなければ、一生こんな所に来ることはなかっただろうなとほのかは思う。

大学のサークルで忙しい麻衣子には友人も多い。こういうことは珍しくないらしいが、興味が無いほのかは未だに参加すべきではなかったと後悔していた。

「ほのかちゃん、呑まないの？」

隣の席に座った竹井という男は、ビールの入ったグラスを差し出した。

「あ、私はジュースで」

苦笑いしつつ、四杯目のオレンジジュースを飲み干す。
合コン。

人数が足りないと嘆く麻衣子の為に出ては見たが、この騒がしい雰囲気にも慣れない。

麻衣子は中心人物であるためか、あちこちに引つ張りだこで話しかけることすらできない。「これ飲みなつて。この後、一大イベントあるんだからさ飲んどいた方がいいよ」

返したはずのビールを、またも目の前に差し出しながら竹井が笑う。

「一大イベント？」

何のことが分からず問いかけると、竹井は下卑た笑みを浮かべ答えた。

「飲み会終わったら、カップル同士で肝試しに行くんだよ」

「肝試し？カップル？なに？どういうこと？」

聞いてない事柄に動揺するほのか。

「あれ？まじで聞いてないの？」

「いや、全然」

話が違えばかりに、慌てて麻衣子の姿を探すもどこにも居ない。

「麻衣子ちゃんなら、肝試しの準備でもう居ないよ。行く前に、君のことよろしくって頼まれたんだ」

そう言つて、五杯目のオレンジジュースを差し出す竹井。

「ビール飲みしとけば、肝試しにも来るはずだから飲みしといてって言われたんだよね。ごめんね、無理させて」

あまりの変貌ぶりに、恐る恐るジューズを受け取る。

「別に何にも入ってないよ。肝試し、俺は一人でも大丈夫だから、しんどかったら帰った方がいい」

周りを見渡すと、他の男女はもう組み合わせが決まっているようだ。竹井の微かに落ち込んだ表情に、何だか自分が悪い気がしてくる。

詳細を話してくれない麻衣子にも腹が立ったが、竹井にその怒りをぶつける訳にもいかない。

ほのかはジューズをテーブルに置くと、今まで手付かずだったビールを取り一気に飲み干す。

「肝試し。私も参加します」

決意すると、ほのかは二杯目のビールに手を伸ばした。

肝試しの場所は、近隣にある森林公園だ。子供の幽霊が度々見られ、見たものは死ぬという噂があるらしい。

「ごめんごめん。忙しくて言うのを忘れてた」

森林公園で合コンメンバーを待っていた麻衣子に問い詰めると、悪びれた態度もなくそう言った。

「まあ、でも、竹井くんっていい人だから」

「もしかして、あの人と私をくつつけるために呼んだわけ？」

麻衣子だけに聞こえるように抗議めいた口調で問いかける。

「あれ、ダメだった？」

「ダメに決まってるでしょ。私は今、彼氏とか」

「最近、おかしい夢見るって言ったじゃない？彼氏でもできれば、ストレスもなくなるわよ」

ほのかの抗議を遮り、言いたいことを言って麻衣子はメンバーたちのもとへと向かう。

「余計なお世話よ」

一人呟く。

「何かあった？」

「ううん。別に」

いつの間にか、隣に来ていた竹井が手書きの地図を広げ出す。

「これ配布されたやつ。この森林の中心地に小さな祠があるらしいんだけど、そこに人形置いたから取ってこいだって」

指で差しながら、ルートを確認していく。

順番は最後の方らしく、ほのかは会話にもならない会話をしつつ時間を凌いだ。

「あ、次俺らの番だよ」

竹井に手を引かれ、森林の中に入る。

「うわ、暗いね」

前のカップルに渡された懐中電灯で、森の中を照らしながら進む。遠くで鳴いているフクロウの声、草花を踏む音だけが辺りに響く。空を見上げれば、生い茂る木々の葉の合間から綺麗な星が見えた。

「あのさ、ほのかちゃんって好きな人とかいる？」

竹井の言葉に、ほのかは立ち止まる。

「あ、俺とかさ、どうかなって思ったんだけど」

照れくさいのか、ほのかを振り向くこともなく彼は言った。

「無理よ」

冷たい一言だった。

「だ、だよー。急にこんなこと言われても」

振り返った瞬間、竹井の顔を綺麗な両手で挟み込まれる。

「だって、お前はここで死ぬんだもの」

ほのかではない中学生ぐらいの女が笑っていた。

「な、何なんだよ、おまえ」

女の顔を挟む力だけで、竹井の足が地面から浮き上がる。

狂気にも似た笑みに、恐ろしくなり声が震えた。女の手がだんだんと強くなる。

挟み込まれる顔が驚愕した刹那、女の手の中で破裂した。

まるで、空気の入りすぎた風船が破裂するように体が木っ端みじんになっていた。

「さあ、お食べになつてください」

女の声に森がざわめいた。

「あれ？私」

痛む頭を振りながら、辺りを見渡す。

地面に転がる懐中電灯に照らし出された木々を見て、自分が今森林公園に居ることを思い出した。

でも、なぜ、自分は地面に倒れているのだろう。

竹井と共に森に入ったのは覚えているが、あとの記憶が一切なかった。

周囲を見渡すも、竹井の姿はどこにも見えない。

「一人だけ逃げたとか？まさかね」

閑寂な森の中で、ふと夢のことを思い出してしまふ。

「とりあえず、麻衣子たちのところに戻る」

広がる不安と恐怖から逃れるように、呟く。

懐中電灯を素早く取り、ほのかは立ち上がる。

公園の中にあるこの森林自体は小さなものだ。

真つ直ぐ歩けば、すぐにでも公園に出られるはず。

よしと気合いを入れ、ほのかは歩き出す。

「・・・・・・何・・・・・・だ？」

誰かの声を聞いた気がして足を止める。

「・・・・・・黽・・・・・・だ」

ところどころしか聞こえないが、人の声であるというのは間違いない。

孤独と恐怖の中に居る自分には、天の助けのように感じて声のする方向へと歩き出す。

これで大丈夫。

そう思った矢先だった。

「きゃっ」

一瞬にして持っていた懐中電灯が叩き落とされ、何かが喉もとに突きつけられた。

それが刀であると理解するよりも先に、襲撃者である男がジッポライターのようなものを翳してくる。

闇の中に灯された炎に男の顔が見えた。

歳は20代前半だろうが、大人とも青年とも言える綺麗な顔立ち、猫のような癖っけがある髪、冷たい目が印象的だった。

彼は何か確認するなり、納得した様子でジッポライターと刀を片付け始めた。

占い、黒いコート、刀、夢の中でみた映像が、ふいに思い出される。いくつもの整合に、ほのかはこの男こそがあの夢の男なのではないかと思う。

「あなたが、私を、殺すのね？」

まだ憶測の範囲内ではあったが、いつの間にか声に出ていた。

口にした途端、無性に腹が立ってきた。

眠れない日々、合コン、森での置き去り、すべてこの男が悪い気がしてきて睨みつけていた。

出来事すべてが理不尽すぎて、どこまでも抵抗してやりたくなった。殺されるとしても、簡単にやられるものか。そう思った。

ホラー

この女は、一体なんなんだ。

龍村 蓮は謂われのない嫌悪な眼差しに戸惑っていた。

それは、ホラーを倒す際に憑依された人間にこそ見たことはあつたが、身も知らぬ、ましてやホラーですらない人間からここまでの敵意を向けられる理由が分からない。

「あんた、一体なにを言ってるんだ？」

そもそも俺がこの女を殺す理由すらないというのに、なぜ殺されると勘違いしているんだ、この女は。

「私分かてるのよ、あんたが私を殺そうとしてること」
きっぱり言い切る女。

どこから、その自信がくるのか分からない。

「あんたが何を言いたいのか分からないが」

「蓮！上だ」

訳の分からない女から逃れようとした瞬間、人前ではなるべく話さないギルバの切羽詰まった声が辺りに響く。

上を見るよりも先に、蓮は女の体を突き飛ばし、自らも反対側へと飛んでいた。

「いたっ何すんの……」

地面に倒れた女は抗議しようとして、新たな訪問者に絶句する。

頭上より降りてきたのは素体ホラーだ。

悪魔のような風貌のそれに慣れている人間など居るはずもなく、女の反応は当たり前だといえた。

「ギルバ。こいつじゃないだろう？今までの気配は」

「ええ。先ほどの気配は強い邪気を伴っていましたが、このホラーとは別物です」

「つまりは、この森には少なくとも二体はホラーが居たってことか」
蓮はチツと舌打ちしつつ、女へと視線を向ける。

戦闘に女を巻き込みたくはなかったが、逃がそうにも他にホラーが居る森をうろつかせる訳にも行かなかった。

蓮は瞬時に刀を抜くと、女との間に居るホラーに斬りかかる。逃げるように頭上に飛び立つホラー！。

その隙に、蓮は女を背にホラーへと向き直る。

「あんだ、大丈夫か？」

横目で見ると、女はどうやら腰を抜かしているらしく、へたり込んだままホラーを凝視している。

「な、何なの？あれ」

予想通りの混乱状態を無視しつつ、蓮は二人から十メートルは離れた大木を指差し言った。

「あの木の裏に隠れてろ。絶対にこつちを除くなよ」

「無理よ。動けない」ヒステリーを起こしたように喚く女を面倒そうに見ながら言う。

「あの化け物の血は人間には毒だ。万が一にも浴びれば、あんたは死ぬ。それが嫌なら這ってでも向こうに行ってる」

そこまで聞いて真っ青になった女は、懸命に立ち上がりゆっくりと大木の方へと歩いていく。

「もう少し、優しい言い方ができませんか？」

苦言を呈すギルバ。

「俺がこういう奴だったのは分かってるだろ」

蓮は女が大木へと移動したのを確認しながら、ホラーへと攻撃を加える。

素体ホラーであるなら、ソウルメタルと呼ばれる特殊な金属で作られたこの刀で充分通用する相手だ。

木々を飛び回るホラーを追い、蓮は刀を投げつける。刀がホラーの胸元に命中したまま、木の幹へと突き刺さった。

串刺し状態のホラーが悲痛な叫びをあげるも、蓮は淡々と刀を抜き、トドメをさす。

ホラーの血が飛び散り、その体が内部から爆発したかのように碎け

散った。

蓮はすぐさま他にも居ないか、周囲に視線を巡らす。

「ギルバ。もう一体の気配はあるか？」

「いいえ。やはり消えたまま、何も感じられません」

「そうか」

蓮はため息をつく、刀を鞘に戻す。

女が大木の裏から、わずかに身を出し、こちらの様子を窺っている。先ほどの威勢はどこへ行ったのかと思えるほど、怯えた目をしていた。

「来ないでっ！」

一歩踏み出した蓮に向かって、女は叫ぶ。

「あ、あんた何者なのっ？あれなにっ？何なのよ！」

混乱状態にあるのか、しきりに叫ぶ女を無視して蓮は女に近づいてく。

「だ、だから近づいてこないでっ。これ以上来たら、警察呼ぶわよっ」

「警察、ね」

蓮は呟いて、馬鹿にしたように鼻で笑う。

「何がおかしいのよっ」

「呼べるものなら呼んでみるよ。呼んだところで、あいつらは何もできないぞ」

女もそれは分かっているのか、それ以上は何も言えないようだった。

「蓮、あまり人で遊ぶものではありませんよ」

蓮のみに聞こえるように、ギルバは言った。

「分かっているさ。やるべきことはやるよ」

呟いて、蓮は改めて女に向き直る。

「な、なに、やろうっての？」

慌てて身構える女をきることなく、蓮は目を閉じた。

手で印を組み、その指先に力を集中させる。

それは法術と呼ばれるものだ。魔戒騎士の管轄外の力ではあったが、

蓮はとある人間より教えてもらい多少なりとも扱うことが出来た。

「あんたの記憶を消させてもらう」

魔戒騎士やホラーの存在は誰にも知られてはならない。それは、彼らが所属する番犬所の掟だ。

人を救いながら、その実誰も自分たちの存在を知らない。

女の記憶を消す為に法術を発動しながら、ふと蓮は考えていた。

誰も覚えてくれていないのに、自分はなぜ戦っているのだろうか。

記憶

また、あの夢だ。

濃霧が広がる世界を見て、ほのかは初めて自分が夢を見ているのだと認識していた。

これは夢で、何をされても現実に影響はない。分かっているはずなのに、心を支配する不安や恐怖を拭うことができないのは何故だろう。

パキツと枝を踏むような音が聞こえる。

頭の中で警鐘が鳴らされる。

逃げる。

本能的に、ほのかは走り出す。

それは、いつもの夢と何ら変わらない行動だ。

夢だと理解しているにも関わらず、逆らえない何かがあった。夢なのだから、戦うことも出来るはずなのに、ただひたすら逃げることに考えられなかった。

背後にある気配が、ほのかの肩を掴もうと手を伸ばすを感じる。

それに捕まれば、自分は消えてしまう。

そんなの嫌だ。

強く思った瞬間、眼前に手が差し出される。光の中から伸びたその手は、誰のものであるかは分からない。だが、柔らかで優しいその手をほのかは知っている気がして、反射的に掴んでいた。

暖かい手に引き上げられるように、ほのかの身体は光の中へと消えていく。背後で、追跡者の悔しそうな叫び声が聞こえた。

暖かな光が世界に広がるのと同時に、握り締められた暖かな手の先から、『ごめんなさい』と言われた気がした。

重い瞼を押し上げる。

真つ白な天井と蛍光灯、それはいつも見ている部屋の様相ではなかった。

「どこ？」呟くのと同時に、引き戸を開ける音が聞こえる。ぼーつとした頭を、ゆっくりと動かすと、部屋に入ってくる父が居た。

慌てていたのか、乱れたスーツを気にせず、父はほのかに駆け寄る。「大丈夫か？」

父が心配そうに尋ねる。いまいち状況が掴めないでいたが、余りにも心配そうに見つめてくる父を安心させたくて、訳も分からないまま、ほのかは頷いていた。

「本当に大丈夫なんだな？」

「うん、大丈夫だよ」

ほのかが答えると、父は安心したのか、床にへたり込む。母が亡くなって以来、父の過保護さは異常なものだった。なぜそこまで恐れているのかは分からないが、父はいつも娘であるほのかを失うことを恐れていた。

不治の病にかかっているわけでも、大事故にあったわけでもないのに、父は娘を失うことを恐れ、外に出ることさえ制限していた。

「なにがあつたんだ？」

父は呼吸を整えると落ち着いたのか、立ち上がり椅子に座り直した。「なにつて？」

その問いの意味が分からず、ほのかは首を傾げる。未だに、自分の状況を理解できないでいた。

「覚えてないのか？」

蛍光灯の弱々しい光を見つめながら、はつきりしなかった記憶が急速に頭の中で再現されていくのを感じた。

初めての合コン。肝試し。謎の黒いコートを着た男。見たこともない異形の生物。

まるで、映画やドラマを見ているようで現実感が感じられない。あれは現実？

それとも夢？

判断がつかない。

それに、あの黒いコートの男は私の記憶を消すと言ってなかっただろうか……だが、記憶で欠けている場所などどこにもあるようには思えない。

もう一つ、解せないこともある。毎晩うなされていた悪夢に出てきた“手”だ。いつも自分は殺されて目覚めるはずなのに、今回だけはあの天より伸びる手に救われた。

一体なぜ？

「どうした？」

急に押し黙り、自らの手をじっと見つめるほのかを父は心配そうに声をかけた。

父は信じてくれるだろうか？

いや、無理だろう。

自分ですら、この状況を理解できないのに、父に話したところで頭がおかしくなったと思われるのが関の山だ。

「全然覚えてない。肝試しに行ったことまでは覚えてるんだけど」

「そうか……」

父は感覚的に、ほのかの嘘に気づいたのだろうか。小さく頷いて、それ以上は何も聞かなかった。

二人の間に流れる沈黙を打ち破るように、ドアがノックされた。

父は慌ててドアに近づき、ほのかからは見えないようにドアを引くと、突然の訪問者と話し始める。ほのかには聞かれたくないのだろう。極力、声を抑え訪問者と話していたようだが、長くなるにつれて興奮したのか、ほのかの耳にも話が聞こえてくる。

「だから、事件については娘は関係ないし、何も覚えていないと言ってるだろう！娘は疲れてるんだ。帰ってくれ」

「少しだけお話を聞かせてくれるだけでいいんです。我々も娘さんを疑っているわけではないんですよ」

事件？なんのこと？

あの化け物のことなんだろうか？

「お父さん」

ほのかは少し気になって、訪問者を追い出そうとする父を呼び止める。

「入ってもらって。私に用があるんでしょ？」

「だが……」

渋る父に「いいから入ってもらって」と再度促すと、父もそれ以上は何も言えず、渋々二人の訪問者を病室へと招き入れた。

「初めまして」

二人の訪問者は、ほのかに警察手帳を見せ簡潔な自己紹介をした。二十代くらいの頼りなさそうな青年は清水。清水をフオーローするよう後方に立つのは、四十代の男は村山と言った。

「竹井克彦くんは分かりますか？」

清水の質問に、ほのかは頷く。

「彼と森林公園で肝試しに行ったことは？」

「覚えてます」

恐らく、記憶がないということを父に聞いた清水は丁寧に事柄を確認していく。

「肝試しの最中、何があったかは覚えてる？」

清水の問いに、ほのかは首を横に振る。

「私、急に意識を失って、それからの記憶がないんです。あの、竹井さん、どうかしたんですか？」

「あ、いや……うーん」

清水は答えていいのか分からないようで、村山に助けを乞うように視線を送る。村山は鋭い目つきで、ほのかを観察しながら清水の変わりに答えた。

「竹井さん、肝試し以降から行方不明なんです。森林の複数の場所から、大量の血痕が発見されてましてね。我々はその血痕が、竹井さんのもので、何らかの事件に巻き込まれたのではないかと捜査をしてるんですよ」

「私を疑ってるんですか？」

「いえいえ。そういうわけではありませんよ」

あまりにも不躰な言動の村山と反対に、清水が優しく答える。

「ただ、一緒に居たはずのあなたに聞きたかっただけなんです。なぜ、自分が倒れていたのかも思い出せませんか？」

清水の優しい問いかけに、すべてを話したい気持ちに狩られるがあと一步のところで踏み止まる。あの化け物のことを言えば、精神的におかしいと思われるだけでなく、竹井の行方不明も自分のせいにするかもしれない。

ほのかはそこまで考えて、幾度も繰り返した言葉を口にする。

「やっぱり、なにも思い出せません」

村山はその言葉に大げさなほど深いため息をつき

「そうですか。では、今後、何か思い出しましたら、またご連絡を」と言って病室を出て行った。

病室のドアが閉まるのを確認して、ほのかはホツと息を吐く。

「疲れただろう？今日は寝なさい。明日、また迎えにくるから」

父はそう言って病室の灯りを消すと、家へと帰って行った。

一人取り残された病室の中、ほのかは黒いコートの男を思い出していた。

意識を失う前に見た彼の空虚感漂う表情が、なぜか今更ながらに気になった。

あれから、数日経ったが竹井の消息は未だに掴めないままらしい。

森林に落ちていた血痕は竹井以外の者もあったようで、遺体が見つからないことから怪奇事件としてニュースに取り上げられたと聞いた。

「やっぱり、あの肝試しのせいかな？」

大学構内を歩きながら、麻衣子があとため息をつく。

「気にしない方がいいって」

慰めてはみたものの、次はほのかの気が重くなる。そうなのだ。

あの日、一緒に居たのは自分で、合コンメンバーの中にはほのか

何かしたのではないかと訝る者も居る。もともと麻衣子以外の人間とは距離を置いていたこともあり、噂だけを聞いた人間の奇異なものを見るような視線が痛い。

「本当にごめん」急に考え込むほのかを見て、考えを読みとったのか頭を下げる麻衣子。

「だから、麻衣子のせいじゃないでしょ。あの合コンに誘ってくれたのだって、家のことを心配してくれてなんだから」

「でも」

「大丈夫だから、次もまだ講義あるんでしょう？私はもう終わりだから、早く行つてきなつて」

麻衣子の背を押し、無理矢理教室へと押し込める。

「また、後で連絡するからね」

手を振る麻衣子に、小さく振返してほのかは大学を後にする。

蝉の鳴き声が激しい森林公園へと向かう。

あれから何日か経つてはいたが、もう一度あの男と話がしたくてほのかは何度も足を運んでいた。

「やつぱ、今日も居ないか」

公園内にある木製のベンチに腰を下ろす。

やはり、夜でなければ彼には会えないのだろうか。だからと言って、あんな恐ろしい目にあつた森林へ夜中に訪れることなど出来そうにはない。

ふうと息をもらした瞬間、ほのかは公園内を堂々と歩く男を見つけた。

あの日と同じ黒いコートを身につけた男は、灼けるような夏の暑さを気にする様子もない。

ほのかは自分でも驚くほど、素早く立ち上がり男を追いかけていた。

「ちょ、ちよつと待って！」

ほのかの制止に、男の足が止まる。

ゆっくりと振り返る男の目が、ほのかを捉えた。

「あんたは……」猫のような鋭い目でこちらを見ながら、彼は自ら

の記憶を探っているようだった。

「どうして」

思い出した途端、男の表情が一変する。

男は人目を気にしつつ、ずかずかとほのかに歩み寄り、その腕を強く掴んだ。

「こつちに来い」

ほのかを引きずるようにして、男は森林の中へと入る。

蝉の懸命な鳴き声の合間に、梢の葉を揺らす音が微かに聞こえる。

誰もいないことを確認するなり、男は一定の距離を保ち凄んだ。

「俺に何の用がある？」

ほのかはそう聞かれ、多少うろたえた。

自分でも、なぜ彼に会いたかったのか分からなかったからだ。

「俺を呼び止めたのは、なぜだ？」

「私の知り合いが行方不明になったの。あなたなら、知ってるかと思ってる」

自分でも取って付けたような理由だと思った。

行方不明な竹井のことを心配はしたが、その為にこの男を探しているわけではないことは自身が理解していた。

「行方不明？それで、なぜ俺を頼る必要がある？」

「あなたが倒した化け物が、関わってるんじゃないかと思ったからよ」

男の鋭い視線を真っ向から受け、ほのかは言った。

「なぜ、俺の記憶がある？あんたから、あの時の記憶は消したはずだ」

少しでもおかしな行動をすれば、この男は躊躇なく刀を抜くだろう。それほどまでに、ピリピリとした重い空気にが二人の間を取り巻いていた。

「あれ冗談じゃなかったのね。残念ながら、記憶が消えたことなんて無かったわよ」

男の威圧に負けないよう、少しでも余裕を持たせた口調で話す。

「記憶が消えてない？まさか、そんなはずは」

男は愕然としながらも、何かを確認するようにまたジッポーライターを取り出した。

ほのかの肩を押さえ、目の前で火を灯す。

入念に調べるも、期待していた何かを得られなかった男は困惑した様子でほのかを見た。

「なぜ記憶がある？俺は確かに消したはずだ」

あまりにも衝撃的だったのか、男は同じ質問を繰り返す。鋭い視線は変わらないものの、動揺しているのがハッキリと分かった。

「私に分かる訳ないじゃない。そもそも、質問したいのはこっちの方！あの化け物はなんだとか、真夏ののに分厚いコート着て刀まで持つてるアナタは何者なんだとか。聞きたいことは山ほどあるのよ」
負けじと男の視線を受け返ししながら、ほのかは早口でまくしたてる。
何も知らないでいるのが怖くもあり、腹立たしくもあった。

「質問をしているのはこっちだ。それに、何者なのかも分からない
アナタに素直に話すわけがない」

「何よそれ。こっちは謂われのない疑いもかかっているのよ。教えてもらえないなら、アナタのこと他の人にも言うから」

そんなことが脅しに使えるのかも分からなかった。だが、口にした瞬間、男の表情が変化した。効き目はあるようだ。けれども、それは悪い方向にだったが。

「言ってみろ。その時は、迷わず斬り捨てる」

強い殺意を向けられ、ほのかは何も喋れなくなる。

「俺はアナタがホラーでないのなら、興味はない。これ以上は、俺に関わるな」

それだけ言って、男は去っていく。

蝉の鳴き声に包まれた森林の中で、ほのかはただ一人悔しさと怒りに震えていた。

嫉妬 前編

「悔しい」

酒井 あけみは、閑寂な家への帰路を涙をこらえて歩いていった。暗い歩道に差す微かな街灯の光に、今日の出来事を思い出す。

彼氏である隆志から「大事な話がある」と言われたのは、今日の朝の話だ。付き合ってから二年、お互いに年も年なので、結婚の話ではないかと舞い上がっていた。

行き慣れた居酒屋の個室に入るなり、そわそわと忙しない隆志。それはプロポーズの緊張からなのかもしれないと思った私は馬鹿だ。個室にいきなり入ってきたのは、いつもあけみと仕事を張り合っていた同僚の姿。

やられた。

突然現れた脇田 佐恵子の姿を見て、あけみは全てを理解していた。佐恵子は隆志の隣に座るなり、何も言わず煙草を吸い始めた。赤く塗りたくった唇から、煙が吐き出される。

「あのね、これは、その」

歯切れの悪い口調で、隆志が話し始めるも要領を得ない。

あけみは苛つくとも爪を噛む癖があったが、この女にだけは弱みを見せたくなくて我慢していた。

「だから、その」

「はつきり言いなさいよ。あたしを好きになつたから、あけみ（あんた）を捨てるってさ」

佐恵子は口角を吊り上げ、あけみを見て笑う。

勝ち誇つたような、馬鹿にするような、イヤらしい笑みだった。

「なに？仕事で負けたから、男を寝取ってまで勝ちたかった？」

あけみは怒りや悔しさで頭がいっぱいだった。

ここに居たくないとも思ったが、何も言わずには帰れなかった。

「はあ？」

「可哀想な人。仕事では、実力ないから男捕まえるのに必死なのね」
「なっ！」

佐恵子の顔色が怒りからか、真っ赤になっていく。

あけみは机に置かれた水が入ったコップを持ち、佐恵子に向かって水をぶっかけた。

「そんな男じゃないから。お幸せにね」

今にも殴りかかってきそうな佐恵子を隆志が抑えるのを、冷めた目で見ながらあけみは居酒屋を後にした。

居酒屋を出た途端、涙が出そうなのをこらえ、あけみは家へと帰る。悔しさ、悲しみ、怒り、隆志に対する愛情と憎しみ、全てが頭の中をぐちゃぐちゃにしていくな。

佐恵子も隆志も、みんな許せない。通り過ぎていくカップルにさえ憎しみが湧き、こんな不幸なのは世界で自分一人な気さえしてき

た。

『憎いか？』

ふと、耳元で何かが囁く声があった。

街灯に照らされた道路を見渡すも、あけみ以外誰も居ない。

気のせい？

夏だというのに寒気がして、腕には鳥肌が立っていた。

あけみは本能的に、そこから逃げだそうとして振り向いた。

目の前に、それは居た。

「蓮。少し休んでは如何ですか？」

ギルバの声にハツとして、龍村 蓮は素振りしていた刀を止めた。

修練中の蓮に声を掛けることなどないギルバが心配するほどに、集中して修練をしていたらしい。やっている間は気づかなかったが、

なるほど疲れからか腕がかなり重く感じられた。

「ずっとやっていたわりには、あまり身が入っていませんでしたよ。まだ彼女が気になっているんですか？」

留め具に埋め込まれていたギルバは取り外され、専用に作られた壁の埋め込みに取り付けられている。彼の視線を受け止められず、蓮はふいつと視線をそらしていた。

「当たつてるみたいですね。で、何が気になってるんですか？」

蓮は刀を鞘に戻し、眉間にシワを寄せながら答える。

「なぜ法術が利かなかったんだ？俺の法術は完璧だったはずだ。あの無礼女は、一体なんなんだ？」

「そのような言い方をしては、彼女に失礼ですよ」

ギルバは女性のことに関すると口うるさくなる。ギルバはどこかフエミニストな面があり、真逆な性格の蓮をたしなめることがよくあった。

「分かった分かった。で、ギルバ様はあの女性のことをどう思う？」
ギルバに口答えすれば、倍になって意見が返ってくるため、蓮は言い直して問いかける。これも、二人の間ではよく見られる光景だ。

《ギルバ》とは旧魔戒語で、《兄》の意味を持つ言葉である。その言葉通り、ギルバは蓮の兄として優しく諭すことが多かった。

「そうですね。私も、法術が利かない人間というのは始めて見たので」

困惑したような口調で、ギルバは言った。

「そうか」

予想通りの答えだった。法術に関しての文献は、昨夜あらかた調べあげたが法術の利かない人間の話など一切書かれていなかった。

俺が失敗したのか？

いや、いつも通り手応えはあった。失敗すれば、自分が一番に気づくはずだ。法術は発動されし、あの女も受けた瞬間に意識を失っていた。

なのに、なぜ？

「魔戒法師」

ギルバの言葉に、思考の世界から一瞬で現実へと引き戻される。そして、ギルバの言葉を吟味するなり、蓮は不快感を露わにした。

「冗談言うな。俺に、あの女に協力してもらえというのか？」

「それが一番だと思いますけどね」

「だとしても、あの女にだけは借りを作りたくない」

そう言つて蓮は目を伏せ、ため息をつく。蓮の思いを汲み取ったのか、ギルバはそれ以上は何も言わない。その心遣いが、蓮にはありがたかった。

修練所を出た蓮は、窓から差しこむ日差しに目を細める。

「まだ、昼か」

修練所の中に窓はない。

分厚い鉄製の扉と壁だけに覆われており、一筋の光すら入らないようになっている。そのため、日中であつても闇夜のような暗さが広がっており、時間が分からなくなることが多々あつた。

蓮は目が光に慣れてくると、窓枠に何かが挟まれているを見つけ

た。

「指令書ですか？」

ベルトのバックルに埋め直されたギルバが尋ねる。

「……そのようだな」

番犬所と呼ばれる魔戒騎士たちを統括する機関がある。そこからの指令は、赤い封筒……つまり指令書にて記され魔戒騎士たちに伝えられる。

「前回のホラーもまだ倒せていないというのに、また新しい指令ですか」

「いや、もしかしたら、催促かもしれないな」

蓮は苦笑いしながら、赤い封筒を手に取った。

ライターを取り出し、赤い封筒を燃やす。瞬間、燃えた封筒から魔戒文字が浮かび上がり文章を作り出した。

『人が作りし灯火の影より生まれし、情念を喰らいしホラー』

蓮が言い終えるのを待つて、ギルバが口を開く。

「恐らくですが、つがい食いのホラー、ユノクのことでしょう」

「つまり、前回のホラーとは違う奴なのか？」

「そのようですね。ユノクを優先して倒せということでしょう。前回のホラーの気配が掴めない以上、私もユノクから片付けた方が効率も良いと思いますよ」

前回のホラーを残したままですつきりしないが、手立てがない以上しょうがない。蓮は渋々とギルバの助言に頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2744v/>

双刃の黄金騎士

2011年10月29日06時25分発行